様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０２１２

研究課題名（和文）消滅の危機にある日本語の指小辞に関する研究

研究課題名（英文）Study of Japanese diminutives

研究代表者
櫛引　祐希子（Yukiko, Kushibiki）

追手門学院大学・国際教養学部・講師

研究者番号：１０６０９２３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、東北方言の指小辞「コ」、富山県砺波方言の指小辞「コ」「マ」、愛媛県西条方言の指小辞「コ」、そして沖縄県首里方言の「グゥー」に関する記述研究である。これらの指小辞は、次世代が継承しない危機的状況にある。したがって、本研究における指小辞の記述は、失われつつある日本語の指小辞に関する貴重な記録でもある。
　歴史的に見れば、日本各地の指小辞「コ」は子という意味を持つコという語から意味変化と形態変化を遂げたと考えられる。また、日本語の指小辞の意味拡張のパターンは、諸外国語の指小辞の場合と一致する。ただし、日本語の場合は、その意味拡張のパターンに東西差があることが本研究で明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study is a description of a Japanese diminutive. I will not only discuss and report on the diminutive "-ko(-コ)" of the Tohoku（東北） dialect, Tonami（砺波）dialect of Toyama and Saijo（西条）dialect of Ehime, but also "-guwaa(-グゥー)" of theShuri（首里）dialect of Okinawa. These diminutives are endangered words in Japan. Therefore, the description I provide in this study is a valuable record about a lost Japanese diminutive.
 In conclusion, the Japanese diminutive "-ko(-コ)" underwentsemantic changes and morphological changes from child(子). In addition, the pattern of semantic changes of the diminutive "-ko(-コ)" accords with the pattern of semantic changes of diminutives in foreign languages in general. However, in the case of Japanese, there are differences in semantic development between eastern and western regional dialects.

研究分野：日本語学

キーワード：指小辞　コ　グワー　東北方言　富山県砺波方言　愛媛県西条方言　沖縄県首里方言

１．研究開始当初の背景

指小辞（diminutive）とは、語基のさす事物の寸法・度合いがごく小さいことを意味する接尾辞だが、それだけでなく、その対象に対する話し手の親愛や軽蔑といった感情的な意味も表す。

指小辞に関する研究は、日本国内よりも海外の方が盛んである。本研究では海外における指小辞研究の成果を踏まえ、未だ十分な研究がなされていない指小辞コと、それと類似する特徴を持つ指小辞の記述をおこなうことにした。さらに、その成果をもとに指小辞コの語史の分析を試みることにした。

なお、本研究で取り上げた日本各地の指小辞は、次世代に継承されず衰退が著しく進行しており、本研究における記述は、消滅の危機にある日本語の指小辞に関する貴重な記録としての価値もある。

２．研究の目的

本研究の目的は３つに大別される。

①日本各地（秋田県大館市、宮城県名取市、富山県砺波市、愛媛県西条市、沖縄県那覇市（首里））の指小辞を記述する。

②文献調査と現地での面接調査の結果を合わせ、指小辞「コ」の語史を分析する。

③日本語の指小辞を研究することで、海外の先行研究では指摘されていない言語的事実を発見し、国内外の指小辞研究の発展に寄与する。

３．研究の方法

本研究の方法は、研究目的に応じて異なる。

研究目的①では、アンケート調査と現地での面接調査を実施した。

▲2013 年 1 月～3 月
・東北地方 6 県 177 地点でアンケート調査
▲2014 年
・富山県砺波市で面接調査（1 名）
・愛媛県西条市で面接調査（2 名）
・宮城県名取市で面接調査（2 名）
▲2015 年
・沖縄県那覇市（首里）で面接調査（3 名）
・秋田県大館市で面接調査（2 名）

研究目的②では、現地での面接調査の結果と合わせ、文献調査をおこなった。

研究目的③では、国内外の先行研究の報告と本研究の調査結果を合わせ、理論的考察をおこなった。

４．研究成果

（１）共通語の指小辞「コ」

日本各地の指小辞コについて調査・研究をおこなう前提として、現代共通語の接尾辞コの意味を整理した。共通語には「踊りコ」「振りコ」のような接尾辞「コ」と「ちびッコ」「隅ッコ」のような「ッコ」による派生語があるが、派生語の意味的特徴を踏まえると、「コ」と「ッコ」の添加する意味には違いがある。指小辞が小ささや親愛の情を表す形態であることから、共通語の接尾辞「ッコ」を本研究では指小辞コとして分析対象にした。

「江戸ッコ」のコが担う＜ある地域社会の一員＞という意味や「隅ッコ」のコが担う＜空間の中心部からの遠さや狭さなどを際立たせる＞という意味は、他言語の指小辞にも共通しており、言語を越えた普遍的な意味として位置づけられる。

（２）東北方言の指小辞「コ」

2013 年におこなったアンケート調査（対象；東北地方内の 177 地点）の結果、指小辞コによる派生語の分布状況は下の図のようになった。使用が確認できた派生語の数が多い地域ほど丸が大きくなる。青森、岩手、秋田、宮城の北部に大きな丸が集中していることがわかる。

【図 1】分布状況

こうした結果が出た理由には、指小辞コが結合する語基のバラエティが、北部の方が南部よりも豊富であるということが考えられる。

また、東北方言の指小辞コは結合する語基が表す対象の特徴に応じて、その意味を変え、「修飾辞（modifier）」的に使用（Schneider, 2003）されている。

例として以下のようなものが挙げられる。

＜小ささ＞…例）石ッコ、犬ッコ（サイズの小さな犬）、**＜幼さ＞**…例）犬ッコ（仔犬）、**＜少なさ＞**…例）雨ッコ、**＜微弱さ＞**…例）風邪ッコ、**＜未熟さ＞**…例）医者ッコ、**＜親愛＞**…例）犬ッコ（犬に対する愛情）、**＜軽蔑＞**…医者ッコ（未熟な医者に対する軽蔑）、**＜謙遜＞**…畑ッコ（自分の所有する畑のことを話題にする場合）

こうした東北方言における指小辞コの多様な意味は、諸言語の指小辞の意味を比較し分析した Jurafsky（1996）で指摘されている変化の方向と同じパターンで拡張したと考えられる。上に示した【図１】の分布状況の結果と合わせると、この意味拡張は東北の北部が南部よりも進んでいることがわかる。

このことは「お茶ッコ」「飴ッコ」などで使用される緩衝表現としての指小辞コにも該当する。緩衝表現としての指小辞コは「お茶ッコ、飲まいん（飲みなさい）」「飴ッコ、やっから（あげるから）」などのように、相手に対象を提供する場面で用いられる。緩衝表現としての指小辞コも修飾辞的なコと同様、東北北部で多く使用されるが、両者とも

＜小ささ＞という意味を起点に派生しており、東北の北部で多く使われることは互いに矛盾しない。

（3）愛媛県西条市方言の指小辞「コ」

東北以外で指小辞コを使用する地域として知られる愛媛県西条市で 2014 年に面接調査（2 名）をおこなった。西条方言の指小辞コは次のような特徴がある。

●生物を表す語彙を生成する傾向がある

「おさご（いたち）」「めめんじゃこ・めめじゃこ（めだか）」「どんこ（川のはぜ）」などの動物語彙、「えびこ（野葡萄）」「すいじこ（すかんぽ）」「ほうしこ（土筆）」などの植物語彙、「あまんじゃこ」「あらしこ」「すぼっこ」のように人間のタイプを表す語彙の使用が目立つ。

●文献で確認できる語彙が複数ある

「めめんじゃこ・めめじゃこ」（『文明本節用集』、室町中期）、「おかまご」（1847 年の『重訂本草綱目啓蒙』に「竈馬 をかまご 河州・讃州 （三七・化生）」とある）、「かかりご」（『真実伊勢物語』、1690）などがある。

●ある空間や時間を表す語彙が複数ある

「へっちょこ（他所）」、「あいだこ（間）」、「たにご（谷間）」、「はざこ（狭）」、「まほこ（真正面）」などがこれである。「はざこ」「まほこ」の語基である「はざ」「まほ」は現代の共通語では使わないが、かつて中央語として使用されていた。

愛媛県西条市では東北の指小辞コのように多様な用法を有する指小辞コの存在は確認できない。だが、西条市はかつて中央（京畿）で使用されていた「～コ」による語彙が複数残存する地域であり、日本語の指小辞コの歴史的展開を知るためには重要な地域である。

（4）指小辞「コ」の語史

文献調査を通して指小辞コの直接のルーツは、古代語の「鮎こ（鮎の子）」「鮒こ（鮒の子）」などの複合語の構成要素として＜子＞の意味を表す「～コ」であると断定できる。さらに、その「～コ」は、語として単独で存在する＜子＞の意味のコから派生したと判断される。したがって、Jurafsky（1996）や Hine・Kuteva（2002）で指摘されている「CHILD＞DIMINUTIVE」という変化を日本語の指小辞コもたどったと考えられる。

ただし、日本語の場合、その変化の内実は二種類に分けられる。古代の文献に「鮎こ」「鮒こ」が登場することから、語の「コ」から語構成要素の「～コ」が派生した**変化Ⅰ**は古代日本の中央で起きたと考えられるが、語構成要素の「～コ」から指小辞コが派生した**変化Ⅱ**について考えるには、指小辞コの派生語に地域差があることを考慮しなければならない。

【図 2】コ（子）から指小辞コへの変化

語として単独で存在するコ …こ（子）

↓ 変化Ⅰ

複合語の語構成要素のコ…（例）鮎こ

↓ 変化Ⅱ

派生語の接尾辞（指小辞）であるコ

…（例 1）あいだコ、まほコ、えびコ

…（例 2）隅ッコ、江戸ッコ

…（例 3）犬ッコ、雨ッコ、飴ッコ

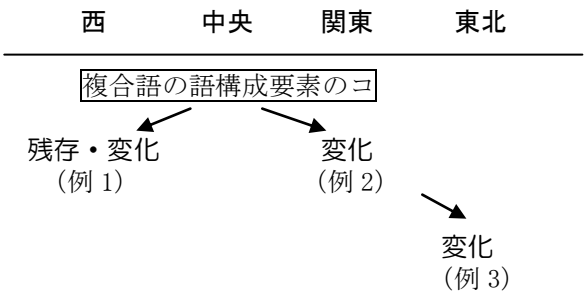
東北での調査と愛媛県西条市での調査結果によると、中央を挟んだ西と東で指小辞コがたどった展開は異なる。

愛媛県西条市には中央語の文献で確認できる語彙が複数ある一方で、上の（例 1）の「あいだコ」「はざコ」「まほコ」やかつて中央語として使われていた語を語基にする「えびコ」「ふぐりコ」「ほうしコ」のように中央語の文献に登場しない語彙がある。これは、この地域には中央から伝播してきた語彙を残存させつつ独自の指小辞コの用法を派生させる土壌があったということを示唆する。

それに対し、東日本では中央から伝播してきた語彙は「ッコ」という促音を介入するかたちで形態変化を遂げる場合が多い。特に、そうした語彙は江戸語として確認される。だが、指小辞コが完全に＜子＞の意味から逸脱し、＜小ささ＞のみならず＜少なさ＞や＜微弱さ＞など多様な意味を表すようになるのは、前述の（2）で論じたように東北においてである。

上で示した（例 1）（例 2）（例 3）の語彙の特徴が異なることは、各地で生じた変化の内実が異なることを物語る。

【図 3】指小辞コの変化の地域差



このように中央から伝播した語が各地で独自の変化を遂げる事象は多くの先行研究で指摘されてきたが、指小辞コの変化に見られる東西差のパターンは、小林隆（1997）や櫛引祐希子（2009）で指摘されたものに一致する。

東北における変化の分岐点には指小辞コ

が＜小ささ＞を意味するようになった変化がある。だが、上で示したように、その前段階として江戸で何らかの変化があった可能性がある。というのも、現代共通語の「隅ッコ」のコや出身者を意味する「江戸ッコ」のコは、江戸語にルーツがあるからである。つまり、東北方言の指小辞コは江戸と東北で段階的な変化を経て意味を拡張させたと考えられる。

こうした指小辞の変化の方言差に関する言及は、国内の研究はもとより海外の研究でも管見の限りない。そういう意味で、指小辞コの変化に地域差があることを明らかにしたことは、本研究の大きな成果と言える。

（5）沖縄県首里方言の指小辞「グヮー」

2014 年に沖縄県那覇市で指小辞コと類似した特徴を持つ沖縄県の首里方言グヮーに関する面接調査（3 名）をおこなった。語源が上代語の「コラ（子ら）」である指小辞グヮーは、語源が「コ（子）」である指小辞コと意味的に似た特徴を有する。

【図 4】指小辞コと指小辞グヮーの比較

意味	東北方言の指小辞コ	首里方言の指小辞グヮー
小ささ	犬ッコ 鍋ッコ	イングヮー ナビグヮー
幼さ	野郎ッコ	イィキガワラビグヮー
少なさ	雨ッコ	アミグヮー
微弱さ	喧嘩ッコ	オーエーグヮー
親愛	犬ッコ 山ッコ	イングヮー ムイグヮー
軽蔑	医者ッコ	シンシーグヮー（先生）
謙遜	畑ッコ	シマグヮー(島)
緩衝表現	飴ッコ	アミグヮー

両者の相違点は、形容語（性質や状態を表す語、副詞・形容詞・形容名詞など）への添加の有無である。指小辞グヮーの方が指小辞コよりも添加しやすい。

指小辞グヮーが東北方言の指小辞コと同様に多様な意味を獲得した理由は二つ考えられる。

ひとつは、語源の「コラ（kora)」が多様な意味を獲得しうるような潜在性を有していたという点である。指小辞グヮーは、対象への親愛の情や軽蔑といった感情的な意味が東北方言の指小辞コよりも強く、対象の小ささを表す意味が東北方言の指小辞コほど強く意識されていない。これは上代の「コラ」（例、「安の河　い向ひ立ちて　年の恋ひけ長き古良（コラ）が　つま問ひの夜そ」〈大伴家持〉『万葉集』一八　4127 歌）の名残であり、語源が異なることが指小辞コとグヮーの違いを決定づけたと考えられる。

もうひとつは、琉球語の音声的特徴による影響である。指小辞グヮーは成立するまでに「コラ kora　→　クラ kura　→　ックヮ qkwa　→　グヮ gwa・グヮ gwaa」といった著しい形態変化を遂げた。この一連の形態変化が関東と東北で生じた指小辞コの段階的な変化に相当し、グヮ―が多様な意味を獲得するような意味変化の引き金になったということも推測の域は出ないものの可能性として考えられる。

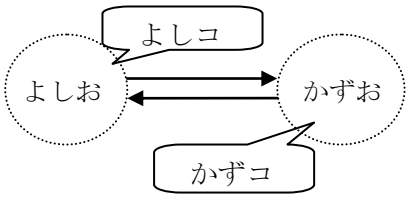
首里方言の指小辞グヮーについては未だ不明な点が多いが、本研究のグヮーに関する記述は失われつつある首里方言の貴重な記録でもある。

（6）人名と指小辞の関係

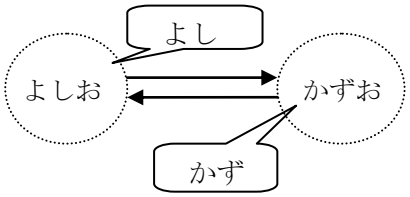
「ひろみ」という名前を「ひろコ」というように、人名に指小辞を付ける地域がある。2012 年から 2014 年にかけておこなった岩手県大槌町（1 名　※科研とは異なる調査)、富山県砺波市（1 名)、愛媛県西条市（2 名)、沖縄県那覇市（3 名）の調査結果をもとに、人名につける指小辞について分析した。

Wierzbicka(1992)は、ロシア語の名前と指小辞の関係について論じ、一瞬の心のありようや話者が伝えたいと思う態度をたよりに指小辞を用いた呼称を複数の中から選ぶ、ということを述べている。富山県砺波市における人名に付く「コ」「マ」の使い分けは、ロシア語にくらべると選べるバラエティは少ないものの、こうした話者の心理が反映されている。たとえば、それは次のようなケースで明らかである。

【親しい関係】



【疎の関係】



東北地方や愛媛県西条市方言の「コ」(例、「としえ→としコ（西条方言)」※女子にのみ使用)や沖縄県の首里方言の「グヮー」(例、「タルー→タルーグヮー（首里方言)」※目上には使わない）も人名に付くが、愛称や敬称的な位置づけである共通語の「チャン」「クン」「サン」が担えない相手との親疎関係を明確に表示できる機能を有している

また、日本語の場合、名前を呼び捨てにするかどうかでも、その場の相手との関係や相

手に対する心的な態度を表明できる。指小辞と人名の関係を見ていく場合は、指小辞が付かない場面も射程に入れる必要があるだろう。

（7）緩衝表現としての「飴ッコ」と「飴チャン」

日本語の指小辞コとチャンを用いた東北方言の「飴ッコ」と関西方言の「飴チャン」は、「飴ッコ、けー（食え)」や「飴チャン、どない（どう）？」というように、飴を他者に勧めたり提供したりする場面で用いられる傾向がある。この運用には、指小辞の緩衝表現としての働きが認められる。

だが、Brown・Levinson（1987）のポライトネス理論を取り入れて「飴ッコ」と「飴チャン」の運用を分析すると、指小辞コとチャンの緩衝表現としての機能は必ずしも同一ではないことがわかる。

そもそも、相手に提供する物に指小辞を付けて表現するねらいは、物の＜小ささ＞を表すことで話者の控えめな態度を示し、相手が感じる恩義を軽減することにある。これはネガティブ・ポライトネスである。一方、物に対する＜親愛＞を表すことで品質の保証をするのと同時に相手への好意も示すのは、ポジティブ・ポライトネスにあたる。

つまり、指小辞の使用によるネガティブ・ポライトネスは指小辞が表す＜小ささ＞という概念的な意味を拠り所とし、ポジティブ・ポライトネスは指小辞が表す＜親愛＞という感情的な意味を拠り所にしている。指小辞の概念的な意味と感情的な意味のバランスが緩衝表現として機能する指小辞を支えているのである。

「＜子＞→＜小ささ＞」という意味変化を遂げて成立した東北方言の指小辞「コ」は、＜小ささ＞という意味を核にして相手のネガティブ・フェイスを脅かさないように配慮する一方で、＜親愛＞という感情的な意味も表すことを利用し、相手のポジティブ・フェイスを満足させる表現として緩衝表現を発達させた。

一方、「飴チャン」のチャンは「飴ッコ」のコにくらべると、もう少し複雑である。「サマ＜敬意＞→サン＜軽い敬意＞→チャン＜親愛＞」という変化を遂げて成立したチャンを用いた「飴チャン」は、＜親愛＞という意味を拠り所にし、チャンの幼児語としての性格も取り入れ、一種の緩衝表現となった。この背景には「お豆サン」「お芋サン」のように敬称として用いられる接尾辞サンを食べ物に添加することを許容する社会的な素地が関西に既にあったことが影響している。

ところで、飴に指小辞を付ける言語は日本語に限らない。ルーマニア語の bombonica（飴は「bomboana」）もその一例である。ルーマニア語の bombonica は、大人が子どもに対して使うか、もしくは大人が子どものために飴を買ったり、子どもの代わりに注文したりするときに使う。ルーマニア語の場合も、「飴チャン」のようにあくまで飴を提供する相手である子ども目線での使用が肝心なのである。

「飴ッコ」「飴チャン」「bombonica」のように「飴」に指小辞をつけて用いる理由には、国や地域を超えて共通する人間の小さきもの（物／者）への認識が深く関与している。だが、そればかりではなく、緩衝表現として飴に添加する指小辞を分析すると、小さきもの（物／者）に対する人間の認識を利用してコミュニケーションの円滑化を試みる人間の言語行動の工夫が見えてくる。

＜引用文献＞

櫛引祐希子（2009)「意味変化の東西差―方言「エズイ」を例として―」『日本語の研究』5－2　日本語学会

小林隆（1997)「周辺分布の東西差―方向を表す「サ」の類について―」『国語学』188　国語学会（現日本語学会）

Brown, Peneple and Levinson, Stephen.（1987）*Politness*：*Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press. ※初版は1978.(日本語訳：田中典子監訳（2011)『ポライトネス　言語使用における、ある普遍現象』研究社)

Heine, Bernd and kuteva, Tania.（2002）*World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge : Cambridge University Press.

Schneider, Klaus. P.（2003）*Diminuitives in English*. Tubingen：Max Niemeyer Verlag.

Jurafsky, Daniel.（1996）Universal tendencies in the semantics of the diminutive. *Language* 72；3：533-578.

Wierzbicka, Anna.（1992）*Semantics, Culture, and Cognition*：*Universal Human Concepts in Culture-Specific Configurations*. Oxford University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）[査読なし]

櫛引祐希子

「飴っこ」・「飴ちゃん」・「Bombonica」の指小辞

『アジア学科年報 8』追手門学院大学国際教養学部アジア学科，2014，p28－35.

〔学会発表〕（計１件）[審査あり]

櫛引祐希子

「東北地方における指小辞「コ」の地域差」第98回日本方言研究会(2014年5月16日　会場；早稲田大学)

〔図書〕（計１件）

櫛引祐希子

科学研究費助成事業　若手研究（B）

課題番号 24720212　研究成果報告書

「消滅の危機にある日本語の指小辞に関する研究」2015 年，p1－125.

６．研究組織

(1)研究代表者：櫛引祐希子

(KUSHIBIKI, Yukiko)

追手門学院大学国際教養学部　講師

研究者番号：１０６０９２３３